

新聞は読者の記憶も保存

大切に保存している新聞がある。2011年3月12日発行の『デーリー東北』だ。
 巨大地震から一夜明け、穏やかなるべき朝は、不気味な静けさに支配されていた。情報は、なかった。昼近くに、デーリー東北が配達された。
 薄い。黒一色、広告も一切ない。「本日は4頁」「災害特別紙面」とある。文字を追う目が急(せ)いた。

新聞社も販売店も被災者だ。にもかかわらず発行は途切れなかった。避難所で新聞を配布した記者は、のちの紙上で「八戸は大丈夫」とのメッセージを届けられた」と使命感を語っていた。

一面左下に、東京電力福島第一原発の異変を伝える記事がある。現在も続く事故の第一報だ。「原子力緊急事態を宣言」。当時の枝野官房長官の言い回しは、何かを隠しているかのようだった。だが、あくまでもそれは、後日読み返してみても分かるニュアンスである。

石橋 司

石万代表取締役



いしばし・つかさ
 1955年、八戸市生まれ。廿三日町商店街振興組合専務理事、「哲学カフェ」主宰。早稲田大卒。

震災翌日のデーリー東北

戦時中の「大本営発表」を信じた人々のことを笑えない。新聞は、時代の記録媒体であると同時に、読者の記憶を保存する装置でもある。

戦時中の「大本営発表」を信じた人々のことを笑えない。新聞は、時代の記録媒体であると同時に、読者の記憶を保存する装置でもある。

まだ続く恐れがある。体験者は記憶を正確に伝えていく責務がある。書かれなかった記憶は、史料の裏付けとなるからだ。
 大震災を思い返したとき、事実の重みに身が引き締まる。記録されなかった幾多の出来事や心情が、語り継がれている。八戸市大字河原木の飼料コンビナート会社で、また野田村の道の駅で、そして宮城県石巻港の喫茶店で、それぞれの「3・11」を聞いた。

私見創見 Monday

聞きたいことだけを聞き、異論に耳を貸さないことは人の世に珍しくない。記憶を軽視し、信じたいことしか信じない歴史修正主義は、陥りやすい過ちだ。サイモンとガーファンクルが『ボクサー』の中で、古今を問わず共通する人の心理をこう歌っているではないか。

現実、危険存亡の秋(とき)だった。1号機は水素爆発を起こし、炉心溶融(メルトダウン)が始まっていた。
 八戸市内では12日深夜に電力が復旧し、テレビ、ラジオ、インターネットが繋がった。ネット上では不安が渦巻いている。100年後、記憶を持つ人は、政府は言い訳を繰り返し、はいなくなるだろうが、事故は

ルtdownを認めたとき、私は原子力に対し懐疑的な立場に転じた。映画『チャイナ・シンδροーム』の予言が現実になるとは、思ってもみなかった。
 3年後のいま、記憶は薄れてきている。一部は脚色しかねない。100年後、記憶を持つ人は、政府は言い訳を繰り返し、はいなくなるだろうが、事故は

すべては偽りとあざけり。それでも人は聞きたいことを聞き、残りを無視する。
 新約聖書の言葉だという。イエスの時代から、人は変わっていない。
 大震災翌日の率直な気持ちを思い返すとき、浅はかな正義感が恥ずかしくなる。